天然木曽ヒノキの美林。樹齢は300年程度と推定されています。

1 2

Like 0　ポスト

注）木曽の木材業界では、天然木曽ヒノキ材を「木曽檜」、人工的に植栽されたヒノキ材を「さそひの杏」とし、それぞれを漢字とひらがなで表記することによって区別して扱っています。本稿では、「木曽檜」材を産出する天然木曽ヒノキ林について言及しています。

江戸時代の禁伐政策がもたらした樹齢300年の美林

今年10月、平成17年6月に伊勢神宮の式年遷宮に使われるご神木が伐採された木曽・赤沢の森を3年ぶりに訪れてきました。林内ではベニマンサクやシロモジが色づき始め、山はこれから一年でもっとも美しい時期を迎えようとしていました。そして森の奥、「千本立ち」や「奥千本」と名付けられた天然木曽ヒノキの林では、胸高直径（地表から1m20cmくらいのところの直径）が60cmを超え、樹高も30mに達する樹齢300年のヒノキがまさに林立している姿を見ることができました。これだけのヒノキの木が1 万所にひしめいているのは木曽、そして岐阜県東濃地方の裏木曽くらいのものです。まっすぐなヒノキの林は、まさに森閑とした空気を醸し出していて、見ているこちらの心持ちも自然と静まってくるような気がしました。

木曽では1500年代から1600年代にかけて木材生産が本格化しました。特に豊臣秀吉や徳川家康の時代には城郭や神社仏閣の建築用材として、それこそ老山に近い状態になるまで伐採が進んだと推定されています。現在のヒノキ林はその踏地もにもたらされた種が発芽し、長い時間をかけて育ってきたものだと言われています。ですので、大きなものの樹齢はだいたい300年くらいで共通していて、最高で400年程度まで。それ以上のものはありません。

木曽で現在のような美林が形成されたのは、江戸時代に尾張藩が厳しい山林保護政策を敷いたことに由来しています。1665年（寛文5年）に設けられた巣山・留山制度では、廣狩用の鷹を保護する目的で山林への立ち入りが禁止（巣山）されるとともに、山林資源を保護するために伐採が禁止（留山）されました。さらに1707年（宝永5年）にはヒノキ、サワラ、コウヤマキ、アスナロの4樹種が禁伐になり、その後ネズコもこれに加えられました。これら5種類の「停止木（ちょうじぼく）」がいわゆる「木曽五木」です。当時は「ヒノキ1本、首ひとつ」といわれるほど、留山の禁伐が厳格に運用されたといいます。こうした厳しい保護政策によって、木曽ヒノキの美林がもたらされたわけです。

将来は「木曽アスナロ」の森になる？

ヒノキの枝葉が上を覆さえぎっているため、林内は薄暗い。

このように大切に守られてきた木曽ヒノキですが、戦後の復興時や高度経済成長期に盛んに伐採されたことや昭和39年にこの地を襲った伊勢湾台風による風倒被害などによって、資源量は激減しています。青森ヒバ、秋田スギと並んで日本三大美林と称され、建築用材としては最高級品に位置づけられる木曽ヒノキもそろそろ遠くない将来、一部の保護林を除いて姿を消すことになるでしょう。それらの保護林もそれぞれの木が寿命を全うすることで失われる運命にあります。

それではヒノキがなくなった後はどうなるのでしょうか。正確に予想することはできませんが、今の状態からすると、木曽五木のひとつであるアスナロの一大群落が形成されるのではないかという見方があります。アスナロは別名をヒバといい、三大美林のひとつ、青森ヒバと同じ仲間です。この木はさっぱりとした明るいところでも育つことができる「陽樹」で、ヒノキの高木に頭上をさえぎられた地表近くの暗いところでも旺盛な成長を示しています。もちろん、周囲のヒノキを母樹とするヒノキの幼木もあるにはあるのですが、成長のために光が必要な「陽樹」であるヒノキは育ちが悪く、アスナロに圧倒されています。

このようなヒノキやアスナロの性質を考えてみると、もともとこの地で天然ヒノキ林が形成されたのは、秀吉や家康の時代の強度伐採で林内にあまねく日差しが注がれるようになったからだと考えることもできます。それらのヒノキが成長し、日差しが葉でさえぎられるようになった結果、ヒノキの成育には適さない環境がもたらされたというのは皮肉な話ですが、これは今に始まったことではなく、かなり前から木曽の山はそのような状態になっていたのかもしれません。というのは、千本立ちや奥千本の森では、そこそこの大きさに育っていてもいいはずのヒノキの後継樹が見当たらないのです。過去には、あるいは現在も、いま立っているヒノキから種が落ちているはずですが、それが育たなかったというのは、早くから将来的にこの地では天然林のヒノキ林がなくなる運命が決定付けられていたのだとも言えるでしょう。そう考えると、江戸時代の禁伐政策が、林業的利用を考慮して適切な抜き伐りに道を開いていれば、ヒノキ林を永続的に循環させる環境を整えることもできたのにと思わなくもありません。

アスナロは地表近くで長い年月を耐えた後、上木が伐採されたり自然に倒れたりして陽が差し込むと、ぐいぐいと上に向かって育ち始めます。これから何百年かが経過した後の世では、「木曽ヒバ」が三大美林のひとつに数えられるようになっているかもしれません。

Like 0　ポスト

1 2

地表近くではアスナロがヒノキの木（中央後方）を取り囲むように繁茂している。

関連する記事はこちら

日本人の暮らしと木

山への思いを受け継ぐ

緑の日本であり続けるために

その木のふるさとを知る

国産材時代到来か？ 最新動向を検証

木の家イベントカレンダー

最近の特集記事

2019年6月15日
やさしくて強い、理想の家をめざす：アイ設計研究室 大前康秀さん

2019年5月15日
磨き上げた職人技で、未来を生かす：西岡建築一級建築士事務所　西岡健一さん

2019年4月20日
大工と左官の職人プロジェクトチーム 総合建築植田 植田俊彦さん 俊司さん

2019年4月10日
本物の家づくりを、自由に。楽しんで：株式会社木神金　高橋一浩さん

2019年1月5日
新春特集 2018年のベストショット集

2018年12月20日
板倉仮設住宅 移設ものがたり part3 大工の声&今後の課題編

2018年12月13日
板倉仮設住宅 移設ものがたり part2 実習編

2018年12月14日
板倉仮設住宅 移設ものがたり part1 概要編

2018年9月4日
事匠 鶴神工務店 新棟梁・鶴弥大輔さん

2018年8月15日
鶴岡総合学舎 その1　動るよう、生き延びよ！

人気のある記事

冬の温熱調査合宿報告
15件のビュー

大工たちによる「家家しょ」の記録
13件のビュー

込み枝角ノミ 復活！ 七井鉄工所訪問記
11件のビュー

設計士・丹羽明人さん（丹羽明人アトリエ）：納得できる答を求めて
11件のビュー

第三回これ木連フォーラム「伝統構法はこれからどこへ向かうのか？」の報告
11件のビュー

「職人がつくる木の家」づくりを未来につなげるアンケート
11件のビュー

吉川 保の熊本市川尻町 震災日誌
11件のビュー

伊勢神宮遷宮・御船船祭り：300年の大木を伐る！
11件のビュー

工務店・西條正幸さん(ビオプラス西條デザイン)：北海道で無垢の木の家づくり
10件のビュー

設計士・川端眞さん（川端建築計画）：小さな石場建ての家
10件のビュー

この記事のタグ

日本の山河を守りたい

日本文化と木の家

赤堀棟梁の林材レポート

同じタグがついた別の記事

2006年3月25日
「林業をやる」ってどんなこと？

2005年2月25日
緑の日本であり続けるために

2008年4月30日
山里の暮らしがなくなる？

2010年2月25日
林業が食べなっていくには、何が必要か

2011年4月25日
林業・同統定勝さん(岡崎製材所)：製材所からはじまる木の家づくり

事務局
〒711-0906
岡山県倉敷市児島下の町3丁目7-3
児島舎内
mail：jimukyoku@kino-ie.net
tel：086-486-5464

(C) 職人がつくる木の家ネット /Shokunin ga Tsukuru KINO-IE net, All rights reserved.

全国各地で樹林資源枯渇が懸念されている。

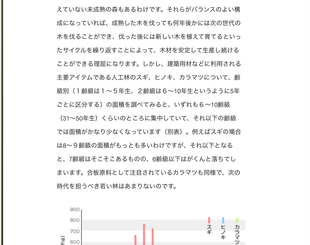
1 2

Like 0　ポスト

「伐りっぱなし」の山が増えている

前回（2008年5月号）のこの欄でも触れたことですが、最近はこれまで日本の木材市場を席巻していた外国産木材（外材）をめぐる状況が大きく変化し、国産木材（国産材）への注目度が飛躍的に高まってきています。中国やインドといった新興木材消費国が台頭して外国産木材の調達環境が悪化し、さらに日本にとって最大の丸太輸入先である ロシアでは、来年から丸太の輸出を実質的に禁止する措置（丸太輸出に高額の輸出税を課す）がとられることになっています。こうした情勢変化を背景に、国内の木材資源がさく注目されるようになっているのです。ただ、この状況を手放しで喜ぶわけにはいかないと私は考えています。もちろん、国産材が注目されるというのは悪いわけはなく、洗濯ムードが盛延していた林業産地では、伐採が活発に行われるようになるでしょう、そこで働く人々にとって収入の機会が増えることになるのは間違いありません。しかし、そうした伐採行為によって、森林がダメージを受けることになってしまっては元もうもありません。

行政用語として「造林未済地」の定義は、「伐採が行われた年度の年度末から3年間を経過しても植栽などの更新が完了していない人工林地。」です。「更新」とは、伐採後の林地を何らかの方法で再び緑に戻すことをいい、具体的には苗木などを人工的に植えつける「人工更新」と、自然にたちされた種が発芽する「天然更新」の2種類があります。つまり、伐採後に放っておいても自然と更新されるのであれば、「造林未済地」ではないとの解釈が成り立ち、実際に上記のようなデータの運用が行われているわけです。しかし、一般的な感覚では、それも造林放置するから「伐りっぱなし」であることに変わりはありません。将来にわたって林業を経営する意欲をなくしてしまい、目先の利益を確保することにのみとらわれて行われる伐採行為が増えていまったりする問題が今も深刻化しているという事実から目を そらすことはできません。



「天然更新」として伐りっぱなしされた山から、いずれは写真のような樹木が林や里山林として回復することが期待されている。しかし、こうした例 に生 な 全 つ 長 い年月を要 る 上に、里山林 ような例 国民に 手が入 ることよ ま で 現 在 が で きていない状態 が ある。 暮らしを成り立たせるために山の資源を利用することが不可欠だと言 と 周 な り。今 の日本 で は 豊 富 な 資 で、 維持していくためには、将来世代に残 た ら ば ば ば